

『AAFC創立十五周年記念コンサート』

十月九日(土) 午後一時からAAFC創立十五周年記念オーディオ・コンサートが手賀沼公園内アビスタ大ホールで開催された。会場の設営は手慣れた会員により予定時間には全て準備が終了した。参加を得てほぼ満員の会場となった。今年度は二部構成とした。第一部は「会員自作の機材による音源再生」として小笠原会員の「手作り音源再生」によるSP再生、石田会員の「ルビウムクロックを使用した最先端デジタルオーディオ」、上條会員の「銘3極管2A3を蘇らせるクラフトマンシップ」による自作アンプ紹介、石井会員の「三十年・熟成に熟成を重ねた改造手作りアンプ」により自慢の音を披露。司会者の巧妙な質問に自作内容が明快になり理解を深めることができた。来場者持参のCDを好みの装置で聴くコーナーでは数名から申し出があった。第二部の模擬例会では三名の会員が通常の例会を短縮した形式で開催。豊島会員は「イヤス音楽ってこんなにすばらしいものなのですか」でポーカー、弦楽器、オーケストラの名曲を自慢の装置で。大久保会員は女性会員を代表して「チェロ 抒情の世界」を内外の名曲を、高橋会員は「パッハ マタイ受難曲の魅力」を代表的な演奏家により三曲を披露された。高橋会員編纂の「パッハ マタイ受難曲のデイスコグラフィ」はAAFC十五周年記念出版として会場で販売された。インターネットでも販売される。コンサート終了後、会員寄贈のCDを来場者に贈呈。アンケートではコンサートが好評で次回も期待する意見が多かった。五時半には全て片付けも終わり約三十名で東我孫子の中華料理店を貸し切った大宴会となり休会、OB会員など懐かしいメンバーも集い旧交を温めコンサート成功を祝った。何時ものことながら会員各位の熱い協力のおかげで無事成功裏にコンサートが終了出来たことを心から感謝申し上げます。

会長



『オーディオと私』

口の悪い友人達に「関東の有名な川で渡らねえのは多摩川だけじゃねえか」などと冷やかされながら、取手に転居して三十余年、いつの間にか古稀も通り過ぎた三年前、「ご縁あってAAFCに入会させて頂きました。同じ趣味を持つ多くの方々を知り合えた幸せを味あわせて頂いております。同じ頃、利根川の土手下の五十坪ほどの土地を使わせて頂き、お百姓の真似事を始め、いつの日か百になれますよう「九十九(つくも)後一」と名乗ることにしました。生まれは人形町末廣の隣町の日本橋蛸鼓町で幼少の頃から寄席好きの祖父に連れられて、上中下席の月に三回は、人形町末廣に通い黄金期の昭和の落語を見聞きしながら育ちました。

昭和二十年代は名曲喫茶とレコード・コンサートの全盛時期。プリジストン美術館のコンサートは、後年オーディオ・テクニカを興された松下さんが責任者だった記憶があります。有楽町のビデオ・ホールでは、大がかりな装置を使った某オーディオクラブのコンサートがあり、ケンペン指揮チャイコフスキーの交響曲第五番(エピック盤)を腰が抜けるほど良い音で鳴らしていたのに出会いました。昭和二十八年高校二年の夏、日本橋三越で中元配達のアルバイトを始めたある日、窓口の姉上様方に、三越新館が未だ興亜火災だった頃、その裏路地を三越に向かって入った左側の「ブラジレロ」でご馳走になり、これが名曲喫茶の初体験でした。そこにはマスターのカメラ仲間だったアメリカ軍少佐婦人の際のプレゼントである鼈甲色のガラスのオートチェンジャーと軍規格黒管6V6PPのアンプでグッドマンの十二時を鳴らしてました。

レコードはウェストミンスターの室内楽が中心でしたが、その中にキアソンが弾いたクープランのクラヴサン曲集(米リリコード LLI2)があり、クープランとは何者なのかクラブサンとはどんな楽器なのかも知らずに聞き惚れた事が、クラシック音楽にのめり込むきっかけになりました。後年そのレコードが手に入り、クラヴサンがヨハンネス・コウヘト(クイエ)の名器だと知り、当時のマイナー・レーベルの見識の高さに改めて驚かされました。昭和二十九年の夏、都内有数のSP・LPのコレクションを誇る銀座二丁目並木通り角の「えちゅーど」に鞍替え。この店のスピーカーは、上向きにセットされた八寸フルレンジと三台のコーンツイーターを取り囲み、百合の花の様な反射板を付けた解放型を、低音用の十二寸密閉箱の上に載せたオールワフエデル・システムでした。今も残るその音味の良さは忘れられません。この店の常連は、小石川の御前とお呼びしていたカベースQを生で聴いた事が自慢の元華族を始め、某総合商社の部長さんなど錚々たるメンバーでした。最年少の恐いもの知らず、図々しくお仲間に入れて頂き、毎度御前宅にお邪魔しては自慢の手巻きクレデンザでカベースQ至高の名演ベートヴェンの弦楽四重奏曲第一〇番「ハーブ」を聴かせて頂き、その度にご馳走になった東五軒町の鰻重は、今も耳と舌に残る至福の思い出です。この「えちゅーど」で最初に夢中になったレコードは、シエルヘン指揮のマタイで福音史家を務めたユエグ・クエノーが歌ったラモーの世俗カンタータ集(米リリコードLL44)で、今も愛聴盤として手元に残っています。二年後のモーツァルト生誕二百年、この店の新春第一回コンサートはランドフスカが1945年二回目に録音したパッハのゴルドベルク変奏曲(米RCA LM1080)でした。若し運命を変えた一枚のレコードがあるものなら、二十歳の春それに出会ってしまいました。寝ても覚めても、この曲が頭の中で鳴り続け、暮れまでも絶対に我が家で鳴らして見せるぞと誓ったものでした。

昭和四十二年 STAXのイヤースピーカーSR1とドライヴァンプSR A7Sに出会ったのが運の尽き、今日まで癒えることがない骨がらみのコンデンサー病になりました。

昭和五十二年、シュワンのカタログでお馴染みの、夢にまで見た久恋のQUAD ESLプロンズを手に入れ、十五年使い何の不満もなかったのに、この道楽の業と言うものでしょうか、平成四年にQUAD ESL163プロに乗り換え現在に至っていますが、因果応報、その報いで片方がトランドフスカとリリー・クラウスを聴くために始めたオーディオですが、音が苦にならないように音を楽しもうと、オーディオは一時休止にして治療に専念しております。

今はサブのIII LZで、畏れ多くも皇室のご紋章と同じで、唯々キクだけにしております。

なお末筆になりましたが、七月の例会でご披露頂いた、高橋様の労作 マタイのデイスコグラフィで、F・レーマンのマタイは、四十九年録音しかないと確認出来、永年の妄が解けましたことを、高橋様に心から御礼申しあげ、雑文を終わります。

十二月に稼いだ全資金を握り締め、暮れの秋葉原を駆け巡りモーターはKS14LS、スピーカーは8PW1を買いそろえ、アンプは友人作のプリ+6V6 PPでシステムが遂に完成、ランドフスカのゴルドベルク変奏曲が我が家で鳴り響いたこの日は、サンザ・クロースでやって来たクリスマス・イヴでした。



左の写真は愛用の機器類を前にした関田様と下はQUAD ESL

関田 真一